仕事人秘録

行列のできる経営相談所 ⑰

チャレンジが扉を開く

富士市産業支援センター長
小出 宗昭氏

出向期間は2年のはずが、静岡銀行の神谷聡一郎会長の言葉でその期間が延びる。

ある日、会長に呼ばれて会長室に伺うと「もう少しあそこでの仕事をやってくれないか。まさかSOHO静岡があんなになるとは思わなかった。どこまでいくかわからない。静銀はこのプロジェクトに懸けてみたい。やってくれないか」。交流会や講演会などの仕掛けをつくりながらベンチャー支援や起業のお手伝いをするうちに、SOHO静岡に相談を持ちかけてくる人たちでにぎわいを見せるようになっていました。

実は神谷会長から「銀行に戻りなさい」と言われたら戻る気でいたのですが私の仕事を評価してくれたことがうれしかったですね。後日、頭取になった中西勝則さんからも「おまえにしかできない仕事だろ」と言われ、意気に感じました。

心がけていたのは「挑戦することは尊い」というメッセージを出し続けて、チャレンジャーがたくさん生まれることにこだわったことだった。

SOHO静岡が立ち上がったときのことを思い出しました。下駄（げた）メーカーが「斬新な下駄を作ったものの思うように売れない」と言ってきたことがあります。そこでSOHO静岡の入居者だったマーケティングプランナーを紹介して販促資材を一から作り直してもらい、東京で開かれる展示会に出展するや複数の大手百貨店から商談が転がり込んできたのです。

抱っこひもの北極しろくま堂の園田正世さんやスポーツ栄養士の古旗照美さんのように小さくても変革を起こすように意識して挑戦してくれることが尊いことなのです。小さなイノベーションを積み重ねていくことで地域は変わっていくと確信しています。

そのためには私自身も地元のため仕掛けをつくりたかったのです。それが講演会だったのです。名前は「ブレークスルーセミナー」。SOHO静岡に関心は無くても「こんな人が静岡に来てくれて無料で話が聞けるのか」と思ってもらえるような著名人を講師として招くことでした。

その中の1人にサッカーJリーグ初代チェアマンの川淵三郎さんがいらっしゃいます。2003年の年明けころだと思います。SOHO静岡に入居する起業家の力も借り、1通のお手紙を出しました。「Jリーグを立ち上げた川淵様は私から見れば起業家に見えます。お金はありませんがご講演をお願いいたします」。こんな内容だったはずです。しばらくして「やりましょう」と返事をいただいたのです。だれもが不可能と思っていたことを熱意だけで実現できたのは自信につながりました。

SOHO静岡には多くの相談が持ちかけられ、順調に業務が遂行できるようになりましたが、6年半が経過した07年夏ごろに静銀副頭取の桜井透さんから思いがけない辞令を受けとりました。SOHO静岡で骨をうずめる気持ちでしたので心が揺れました。

川淵三郎さんにはその後も講演をお願いした

許諾番号30081863日本経済新聞社が記事利用を許諾しています。

掲載日 2019年07月03日 日経産業新聞 015ページ

(C)日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。